平成24年（2012）11月15日発行

再発見！兎原住吉、昔を未来へ
住吉歴史資料館

第５号

住吉歴史資料館だより

御旅所、御旅公園より秋の六甲連山をのぞむ

防災活動と資料館のお手伝い

住吉歴史資料館事業推進委員会

平成24年10月28日の恒例お茶会では、そのイベントとして、「阪神淡路大震災と住吉」展をおこなった。

昨年3月11日の東日本大震災で、改めて防災の重要性に気づき、各学校においても防災教育、防災訓練が再認識されて来ている。当資料館は、昨年のお茶会でのイベントで、「防災と私たち」展を開催。昭和13年（1938）の阪神大水害の教訓を子供たちとともに考えた。これには国土交通省六甲砂防事務所の協力を得て、貴重な写真等を借りることができた。

ところが、当然のことながら、参加した子供たちは、阪神淡路大震災後に生まれており、この震災を体験していない。

今、各学校が行っている防災の活動をバックアップするため、今年度は、阪神大震災を取り上げ、防災のことを子供たちと共に考えたいと思っている。

資料館が持つ資料や写真を利用し、阪神淡路大震災について、住吉の状況・実態はどうであったのかをまとめるべく、聞き取り調査も始めている。

阪神淡路大震災の聞き取り調査を行っていく中で、住吉地区の立地を活かしたやり方で住吉の人たちが復興に努力したことが分かって来た。従来、神戸市や東灘区がまとめている復興の記録には表れないユニークなものであった。

それは、住吉の住宅街をいく筋か流れている水路をうまく利用し生活用水に活用したこと、例えば、住吉中学の避難所では、水洗トイレに利用でき大変助かったことが分かっている。

阿弥陀寺では境内を近隣住民に開放して頂き、ただちに避難所となっ

資料館だより 第5号目次

防災活動と資料館のお手伝い
住吉歴史資料館事業推進委員会
……1･2ページ

住吉の風景 —だんじりが似合うまち
住吉歴史資料館事業推進委員
内田雅夫
……2～5ページ

住吉川･水車小屋跡の見学会
住吉歴史資料館事業推進委員
前田康三
……6･7ページ

住吉村誌を読む 住吉村と摩耶山
神戸大学地域連携センター研究員
住吉歴史資料館専門委員
木村修二
……8～11ページ

住吉歴史資料館ご案内

再発見！兎原住吉、昔を未来へ　がコピーです。

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。
   関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。
   展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画して
   みんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。
   成果の発表。

●住吉歴史資料館の刊行物●

1. 本住吉神社詳誌　平成22年5月刊
2. 兎原だんじり本　平成13年刊
3. 住吉歴史年表　平成19年刊
4. 住吉歴史資料館だより創刊号　残部僅少
5. 住吉歴史資料館だより第2号
6. 住吉歴史資料館だより第3号
7. 住吉歴史資料館だより第4号
8. 住吉歴史資料館だより第5号
9. 住吉歴史資料館だより臨時増刊
   住吉谷の水車展　（平成22年秋イベントの冊子資料）

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1．各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2．各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3．各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車（いわゆる“馬力”）の道具類などの労働具。
4．古い写真（近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など）、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5．災害時の記録や写真。（阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など）
6．戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7．だんじり、住吉祭の写真。（渡御、宮入、宮出し など）

これは一例です。どんなものでも捨てる前に資料館に相談して下さい。貴重な発見があるかも知れません。寄託（資料館でお預かりする）、寄贈（資料館に頂く）等、適切な処置を行います。文化財であるとともに個人情報としても適切に取り扱います。

また、長年住吉に住んでこられた方々に気軽にむかし話をしていただくことも考えています。ああ、あの人なら、住吉のこと“よお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

編集後記

東日本大震災の復興は被災者の我慢、努力で、やっと軌道に乗りかけておりますが、ここ住吉においても各学校では、子供たちに防災教育をして、いざというときに備えようと尽力願っています。住吉歴史資料館はそのお手伝いをと考え、今年は、阪神淡路大震災と住吉」を10月28日の恒例お茶会のイベントに取り上げました。

住吉は、その町のなかを流れる水路の水、また、住吉学園という核があったおかげで、他の所とは違った、復興の足取りを行ったことがわかって来ています。

専門委員の木村先生には、摩耶山と住吉の深い関係につき明らかにして頂きました。住吉を起点に参拝や登山の人たちが行き来したことがわかります。

事業推進委員会では、例年の住吉祭でだんじりが巡行する住吉の江戸時代末の風景につき想像しました。だんじりが似合う美しい村の風景であったと思われます。

渦ヶ森小学校では、住吉川を総合的にとらえることで地元につき学習できないかと工夫をしておられます。夏休みを利用して、住吉川にたくさん展開していた水車につき、その跡地を見学するお手伝いをしました。

住吉歴史資料館は、このような活動を通して、住吉のことを皆さまにお伝えし、住吉を知って頂き、よい街、よいふるさとと思ってもらえるようにと念じております。

（M.U.記）

■資料館の開館日は毎週木曜日の午前中です。
　また、別途、日曜日は展示室を開館しています。（世話人会の委員の方がお世話）
■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。

住吉歴史資料館　本住吉神社内御本殿西　〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2　fax専用078-201-3738　メールアドレス shiryoukan@iris.eonet.ne.jp

住吉の風景―たんじりが似合うまち

住吉歴史資料館事業推進委員　内田雅夫

た。ここでは、お寺の理解の下、西地区協議会や青年団の人たちが、避難所の運営にあたった。これは平素から普通の近所付き合いをしていた現われである。

連携のとれた、気心のしれた人たちがリーダーとなり手足となって働いたことで、寄り合い所帯の避難所の不満、ストレスがうまく解消されつつ立ち直っていったことも挙げらる。

上の二つのケースとも、住吉学園を中心にした住吉各地区の協議会や各団体が日ごろから地道に活動をしているからこその行動である。地区の人たちが機転をきかし、町内を流れる水路の付け替えをして住吉中学に水を誘導できたことや、若いころからの青年団活動を経て協議会の役員になり地域住民の世話をしてきたからこそ出来る臨機応変の措置がとれたこと、或いは、五月の本住吉神社例大祭ではだんじりを引く若い衆たちに大量のにぎりめしを炊き出しした婦人会の女性たちの経験も生かされた。

震災の聞き取り調査は始まったばかりだが、引き続き住吉全体のことをつかむように努め、貴重な資料として生かせるようにしたいと考えている。

馬場先御旅筋明治中期（1900年頃）

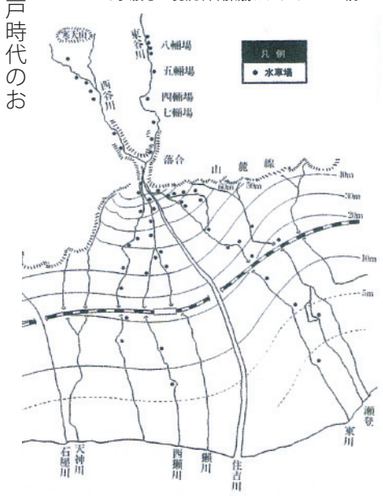
馬場先の現況、御旅筋ほぼダイエーの前

江戸時代のお祭の様子をさぐる第２回目です。

江戸時代の末、安政二年六月晦日吉日の住吉祭の古文書である、「御輿御幸記録」後半に記載の、「定」にある「宮入順番」、「宮より地元へ引き取る順番」、「浜行き順番」、並びに、「浜より引取る順番」は、参加「楽車」（おそらく〝だんじり〟かと思われます）の巡行場面、並びに巡行時の位置順序を記載してくれており、これらより、祭礼当日の住吉、庄内の「楽車」の動きをある程度推定して考えることができます。

「御輿御幸記録」の安政二年六月晦日吉日は太陰暦六月三十日。現在の太陽暦と西暦に置き換えると一八五五年八月十二日となります。一五七年前の暑い盛りの「夏越のまつり」だったと思います。

住吉村、並びに、庄内氏子である野寄村、岡本村、田中村、横屋村、魚崎村、そして西青木村の「楽車」はどのような動きをしていたのでしょうか。



住吉川水系図明治18年（1885年）陸地測量部

その前に、江戸時代末期の安政二年の時点では農村漁村であった住吉村並びに、魚崎村、西青木村、横屋村、田中村、岡本村、そして野寄村の道路事情や、社会的な制約をまず考えてみましょう。これは、当時の「楽車」の巡行やそのルートを考える場合、ポイントになるものです。

そして、次回第３回目で、「楽車」の動きを追って見たいと思います。

宮入後の境内明治30年（1900年頃）

まず、道路ですが、どのような整備状況だったのでしょう。

明治時代中期一九〇〇年ごろの馬場先の写真（２ページ。本住吉神社宮司横田先生保有、今のダイエー前の御旅筋。）を見ますと、もちろんアスファルト舗装はなく、石でこぼこした、牛馬の荷車が通る、いわゆる、「ごろた道」であったと思われます。この道が、宮入りする楽車がずらっと並ぶ住吉祭のメインの道路となります。

神社鳥居前西国街道相撲松を東から現況

神社鳥居前西国街道相撲松を東から1910年代大正13年以前

一方、住吉村並びに庄内本山、魚崎、本庄の道路がどのように通じていたかを見てみましょう。

幹線道路としては、東西に二本。南北には、住吉村では一本。庄内でも、一本か二本で、これらの道以外は道とは名ばかりのあぜ道であったと思われます。

東西の幹線道路を見てみると、西国街道本道があり、これは現在の国道２号線にあたります。本住吉神社の鳥居前の歩道がそれにあたります。もうひとつは、西国街道のバイパスの浜街道。これは現在のほぼ国道43号線にあたります。呉田会館の北側を通っていました。

空区有馬道現況

空区有馬道1969年頃

南北には、住吉村の「車道筋」という、現在のお旅筋から有馬道にかけてのみち。上で言う「ごろた道」です。庄内の本山、魚崎、本庄では、「とや道」などでしょう。

西国街道本道は、いわば、官道。大名行列や、幕府や諸藩の使者、公用飛脚便などが通り、身分制度の厳しかった江戸時代では商人などの民間人はトラブルを避けるため、気楽な浜街道を利用したといわれています。

鳥居前相撲松現況

表鳥居前相撲松
大正13年以前

住吉川には、橋が架かっていたのでしょうか。官道である西国街道本街道には、架橋されていたはずです。文化元年（一八〇四）年の太田蜀山人の「江戸長崎道中記」の記述では、「住吉川というやや大きい川があり板橋が架かっていたが歩いてわたった。」とあります。（横田宮司著「本住吉神社紀」より）

本住吉神社全図　明治38年頃（1905年）

左の古い絵図を見ますと、今の国道住吉橋の上、ＪＲより南側に西国街道の橋が架かっていた事がわかります。

さて、浜街道には橋がかかっていたのでしょうか。43号線が開通するまで、相生橋、明治橋、島崎橋などが住吉川下流にはかかっていました。

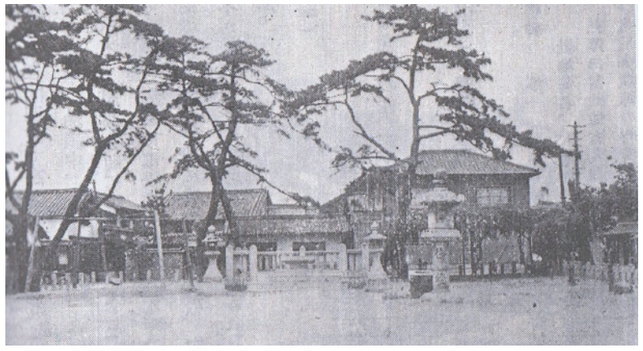
江戸時代でも西国街道本道のように浜街道にも板橋が架かっていたと思われます。

いずれにしても、橋はあったに違いないですが、重い車の通行に耐えうる堅牢な橋は架かっていなかったと思われます。

尚、本住吉神社から南の道へ伸びる「御旅筋（おたびすじ）」は、松並木で、横にきれいな水路が流れていました。江戸時代、この道は元々神社の敷地で馬場でした。現在では五月の祭礼宮入り前にだんじりが勢ぞろいする道です。昔は、今のダイエーの場所に、大海神社（楫取明神）（ダイカイ神社或いはオオワタツミ神社、カジトリ明神と読みます）がまつってありました。これは大事な点で憶えておいて下さい。2ページの馬場先の写真は、大海神社の池の水が獺川（うそがわ）に流れ込む様子が映っています。先ほど出てきた水路が、この獺川です。

住吉村絵図天明八年（1788年）江戸中期

住吉川下流明治橋より魚崎駅　大正末頃（1910年頃）



旧御旅所　呉田会館南にあった　1ページと比べてみて下さい。　大正末頃（1910年頃）

この池は、「御祭神の神功皇后がお姿を映し見られた池」といわれていました。

大海神社は明治の末に本住吉神社の境内に遷し替えられました。明治政府が小さい神社の整理統合を命令したためです。

それまで、住吉村の各所に、たくさんのお宮がまつられていましたが、ほとんどが本住吉神社境内に統合されました。大海神社の他、「大日女（おおひるめ）神社」もその一つです。阪急有馬道踏切南の「庚申塚」近くにありました。だから、空区が例年おまつりを行います。同じように大海神社は吉田区が行います。いずれも、元々まつってあった場所がある区であったことによります。

明治政府の整理命令以前は、日本全国各村々のあちこちに小さいお宮があり、農作業の行き帰りにお百姓が手を合わせる風景がありました。これこそ日本のすばらしい風景であったのですが、それもなくなりました。

さて、獺川（うそがわ）、という名前の水路が出てきました。もうひとつ、当時の住吉祭を考える上で大事なポイントは、住吉村の中にはいくつも水路が流れていたという事です。これらは元々、水田の灌漑用の水路でした。

住吉川の本流から、山田区のあたりで取り込まれて、灌漑以外には水車を回したり、生活用水として使用されたりしていました。

住吉川のきれいな、きれいな水で、山田区、空区、それに本住吉神社の境内、ご本殿の西、今の資料館の門柱の前のあたり、そして、お旅筋の東側、さらに、住吉小学校の南側にもさらさらと流れ、呉田区を通り、海に注いでいました。

現在、これらは、ほとんど地下に埋められてしまっています。2ページの水系図を見て下さい。

最後にもうひとつ、本住吉神社の御旅所は、今の場所でなく、現在の呉田会館の南、介護施設のある場所にありました。御旅所は、住吉村各町や庄内各村の各「楽車」の集合、解散のポイントとなっていた地点です。憶えておいて下さい。

さて、これらから、以下のことが言えると思います。

「楽車」が現在の「だんじり」に近いものであるとしても、そんなに大きなものではなかったのでは、と思われます。それは道路と住吉川の橋の事情からの推定です。

また、庄内の野寄、岡本、田中、横屋、西青木、魚崎の「楽車」が本住吉神社に宮入のために住吉村に入ってくるのは、西国街道本道は通らず、魚崎村西はずれに集合し、浜街道を通り、島崎橋を渡って来るルートであったと思われます。

呉田浜に面した鳥居（馬場先道の終点、浜より北を望む）
右側の酒蔵の場所が現在の御旅所　昭和13年（1938年）

庄内の楽車は住吉川を渡り、呉田のお旅所に集合して来ます。一方、住吉村の楽車は御旅所で庄内の楽車の到着をまち、「宮入順番」に従い、動き出します。

青々とした田園のなか、美しい松並木と獺川（うそがわ）のさらさらと流れる水に沿い本住吉神社の鳥居に向け馬場先お旅筋を北上します。

午後五時ころでしょうか。六月三十日は太陽暦の八月十二日、夏の夕日が六甲摩耶の山々に落ちかけるもっとも美しいときです。そのなかをカネや太鼓ではやしながらきれいに飾られた楽車が上ってゆきます。

住吉の夕日は、ことのほか美しく、明治大正時代の灘八景名所でも「住吉の夕照」として挙げられています。夏の終わりの夏越（なごし）の祭は、これに加えて楽車の行列が通り、きっと夢のような光景であったと思います。

六月三十日の夏越祭で、住吉や庄内の村々では夏が終わり秋。いよいよお盆七月十五日の準備に入ります。すべて旧暦での話です。今の七月末から八月にかけてのことです。

夕日が長峰山に落ちる

以上で、住吉村や庄内氏子地域の野寄村、岡本村、田中村、横屋村、魚崎村、西青木村の事情をざっと見てきました。次の第3回では、いよいよ、楽車の動きを追って見たいと思います。

住吉川・水車小屋跡の見学会

住吉歴史資料館事業推進委員　前田康三

8月3日の見学会は渦が森小学校の先生方を水車跡地にお連れして現地で詳細な説明を実施致しました。

水車工業は近代の住吉村の中心的な産業であり、現在では1台も稼働していませんが、産業遺産ともいうべき、その跡地が住吉川の西谷、東谷のあちこちに残っています。樹木、雑草に覆われて消滅してしまう前に何とか保存の手立てはないかと考えております。

Ⅰ．住吉村・水車小屋の歴史

江戸中期（17世紀初め）に小規模な水車が動き始め、菜種や綿種の油を絞るのに利用されていた。以後、日本全国から大坂（大阪）へ菜種等が集められて、住吉村の水車小屋で菜種油に加工されて再び、大坂より江戸（菱垣廻船）及び日本全国に運ばれた。

その後、水車の活用方法として油加工から精米や製粉にも利用され、特に酒米精製に不可欠となった。

＝水車の前は人力で精米しており、時間がかかり・精製の質が悪かった。

酒米精製が向上するとお酒の透明度が良くなり、それに加えて、水車稼働による大量生産が可能になった事から、全国から注文が入り大坂より江戸（樽廻船）及び日本全国に運ばれた。

＝『灘五郷』は日本一の酒どころとなった。

明治末から大正中期の全盛期には88輌の水車小屋が並んでいた。（住吉村誌より）

Ⅱ．水車小屋跡を訪ねて

先生方と水車跡地を訪問したのは小峰堰堤附近の旧本山村・五輌場及び旧住吉村・八輌場で、先生方（吉森教頭先生含めて8名）及び資料館（3名）で8月3日午前9時より暑い日差しの中、水車小屋跡の現地視察を行いました。

五助ダム下流にある水路をたどりながら五輌場の水車小屋跡地附近を見て、水車溝・ひきうす等がまだ残っている状況を見ていただき、引き続き八輌場内・「白鶴車」跡地が原型を残しておりますのでそこで水路・水車溝等の説明を行いました。

先生方にとっては、住吉川流域に大規模な水車工業が展開し発展していたことはもちろん初耳で、驚かれるとともに灘のお酒が全国区になって行く原動力であったことなど、大変参考になったとお言葉を頂きました。

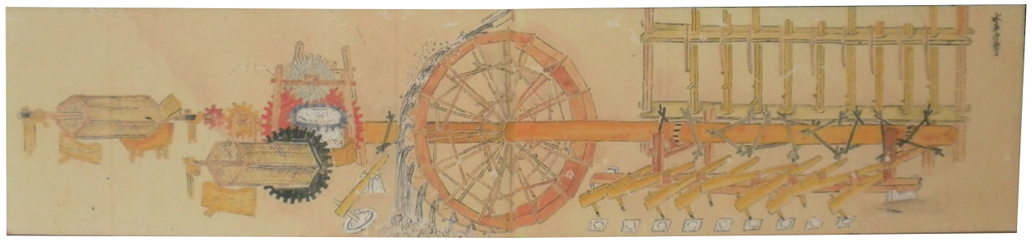
うっかりすると見落とす水車跡地

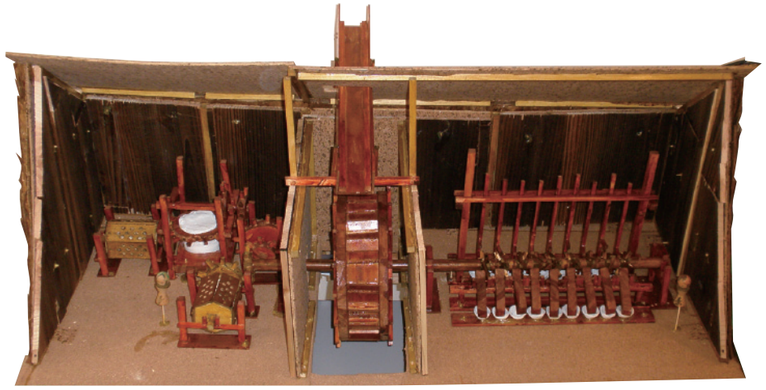
水車の流水路

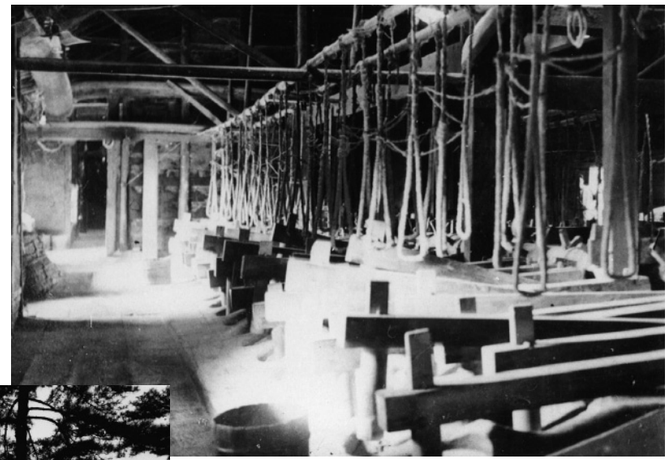
水車のいわゆる“たきつぼ”

放置された「引きうす（臼）」

Ⅲ．水車の写真より


江戸時代の灘目水車図


灘目水車図よりの水車小屋模型
（住吉歴史資料館蔵）


水車小屋内の作業風景

昭和54年まで稼動していた小松崎氏の水車小屋　(火事で消失)
住吉村字焼ヶ原。住吉山手9丁目です。

《『住吉村誌』を読む》 住吉村と摩耶山

神戸大学地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員　木村　修二

■信仰の対象としての六甲山系

住吉の北にひろがる六甲のやまなみは、古くから信仰の対象でもありました。それは、巨大な岩石を神体とする神社が、六甲山中に多く鎮座していることによくあらわれています。

住吉からもほど近い、本山の金鳥山の山腹に鎮座している保久良神社の境内にも、多くの巨石があり、それらを神の降臨する磐座ととらえ、古くから信仰の対象とされてきました。境内からは、今からおよそ二〇〇〇年前の弥生時代の土器や石器に加え、儀式に使用された銅戈と呼ばれる武器などが出土しています。

保久良神社

神生岩（保久良神社境内の磐座）

こうした出土遺物は、住吉の近くでも発掘されており、昭和三九年（一九六四）には桜ケ丘遺跡（灘区）から一四個の銅鐸と七本の銅戈が発掘（現在は神戸市立博物館に収蔵）され、住吉でも昭和九年（一九三四）に、渦ケ森遺跡で一個の銅鐸が発見（現在は東京国立博物館に収蔵）されています。いずれも山中での発見であり、当時の人々が六甲山を儀礼の場ととらえていたことをあきらかに示しています。

渦が森出土銅鐸（『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯より）

灘区に位置する摩耶山の頂上（海抜七〇二メートル）にもいくつもの巨石群があり、その内の一群は、現在「天狗岩」と呼ばれ、岩そのものが「石丸猿田彦大神」という神体として祀られています。

摩耶山頂の天狗岩

前号の資料館だよりでも触れましたが、住吉の西山上部にも「天狗岩」があるように、六甲山中にはいくつかの「天狗岩」が存在しています。こうした「天狗岩」の存在そのものが山岳信仰の場だったことを示してあまりあります。

摩耶山頂にある「天狗岩」はかつては「行者石」と呼ばれていたらしく、今日でもなお修験者による信仰がなされています。

ところで、この摩耶山の天狗岩の近くには、かつて忉利天上寺（古義真言宗）の伽藍（寺の建物）がありました。

天上寺は、大化二年（六四六）にかの法道仙人によって開かれたと伝えられ、古くから本尊の十一面観音像と釈迦の母である摩耶夫人像とを安置する霊験あらたかな仏教聖地として、全国的にも知られて参詣者が絶えることはありませんでした。一説では、灘目の寺院で天上寺と無関係のものはなかったといわれるほど、すぐ麓の村々（現在の灘区域）との関係は深いものがありましたが、兵庫津や現在の東灘区域の村々、丹波や播磨までその信者がいたことがわかっています。

■住吉と摩耶山

さて、住吉もかつては摩耶山忉利天上寺と深い関わりがありました。その点を『住吉村誌』の記述の中に求めていると、九九〇ページで次のような文章にぶつかりました（読みやすくするために漢字やかなづかいを現代様式にあらためています）。

福　徳　講

摩耶山観世音を信仰し、これに参拝する講社である。最初は茶屋区の國本太介氏が講元となって万事世話をしていたが、没後同富太郎氏がこれを亨け後中島竹蔵氏が講元であった。

そもそも講員が摩耶山に講詣りを始めたのは明治二十年からであるが、講そのものはもう少し以前から存在していたようである。起原は摩耶山の住職が御影町の河東家を度々訪れられるので同家を通じて心安くなり、同師より住吉方面において講を結んでほしいとの内意を受けて、前記國本太介氏が横田延次郎氏らと協議して組織したものであった。講員は山田、空、西、茶屋、吉田の方々におよび、盛時には百数十名もあり頼母子なども設けられ盛んに講をたいたこともあった。毎春うち揃って摩耶山へ参詣するのであるが、この講員の寄附によって立派な玉垣が建っている。なお同講には当時の摩耶山住持から贈られた観世音の像があるが、これはなかなか立派な作である。

これは戦時中に完成していた原稿ですから、書かれている内容も戦前の状況が書かれているとみていいでしょう。戦後、この福徳講はどうなったのでしょうか？　末尾に書かれている摩耶山住持から贈られたという観音像は、いまでもどこかに残っているのでしょうか？　もし、ごぞんじの方がおられたら資料館までぜひお知らせいただきたいものです。

いずれにしても、住吉村に摩耶山天上寺を信仰する多くの人がいたことはまちがいありません。

■摩耶山中に残る福徳講の石碑

ところで、摩耶山忉利天上寺は、今から三六年前の昭和五一年（一九七六）一月三〇日に本堂をはじめとするほとんどの堂塔伽藍が焼失してしまいました。摩耶山は、過去にもたびたび火災にみまわれており、そのたびに、古くからの建物が焼失していますが、昭和五一年の火災は、まさに「大火」と呼ぶにふさわしく、本尊の十一面観音像と、弘法大師が唐より持ち帰ったと伝えられている摩耶夫人像も焼失してしまいました。関係者のショックははかり知れないものがあったと思いますが、それでも復興に向けて動きだし、檀徒や協賛企業などの多大な協力を得て、現在は旧伽藍からおよそ九百メートルほど北に位置する場所（「元摩耶」と呼ばれる地）に金堂（本堂）・摩耶夫人堂・中院（庫裏）・鐘楼・権現社などが再建されています。

焼失前の摩耶山天上寺（戦前絵葉書）

移転再建された摩耶山天上寺

一方、旧伽藍はその後どうなったのかというと、天上寺と神戸市との協議により、天上寺が所有していた旧伽藍の地と神戸市が所有していた元摩耶の地を交換することになりました。それにより、旧伽藍は摩耶山史跡公園として生まれ変わることになりましたが、自治体の所有になったことで、旧伽藍周辺にあった宗教的な施設や設備のほとんどが撤去の憂き目に遭うことになりました。それにより、火災を免れた鎮守堂や旧伽藍背後の山中にあった奥の院、さらに四国八十八ケ所石祠が撤去され、天上寺にあった三坊の塔頭のうち類焼を免れた王蔵院と蓮花院も廃院されました（名義だけは天上寺の住僧がそれぞれ継承されています）。

また旧伽藍から寺が移転したことの影響は周辺部にもおよび、摩耶ケーブル駅から伽藍のあいだにあった茶屋などの諸店舗もことごとく廃業せざるをえませんでした。

摩耶山史跡公園

朽ち果てつつある摩耶山内の商店跡（摩耶花壇）

しかし、旧伽藍周辺から何もなくなったのかというと必ずしもそうではなく、現在でも仁王門の建物が残存（仁王像は移転）し、仁王門から旧伽藍までの延びる二〇〇段ほどの石段やその脇の石垣はそのままに残されています。また、石段脇には、寄進者の名を刻んだ玉垣もその大部分がそのまま残されていますが、こうした寄進者の名を刻んだ石造遺物のなかに、住吉の福徳講の石碑が残されています。

福徳講石碑

この石碑は、「摩耶山住吉保存講」と銘打たれ、発起人で金九六円を寄進しておられる國本太助さん以下九五名の名前が刻まれています。寄進金額は合計で一二〇〇円にものぼっています。そして末尾に明治四一年（一九〇八）九月に建設されたことが刻まれています。また碑の横面には、「石工中島榮七㊞」と刻まれ、製作した人物も判明します。

石碑横側の銘文

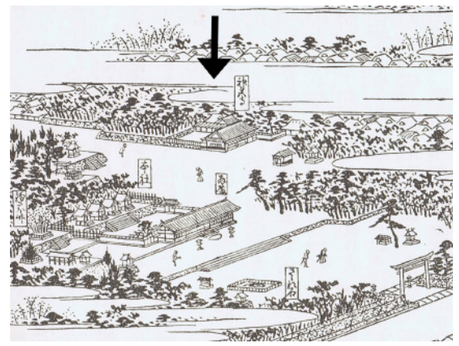
何か特定の目的があって寄進がなされたのか、そうでないのか、そのあたりはよくわかりませんが、廃仏毀釈（明治維新後の仏教排斥運動）の危機などをむかえ、仏教寺院にとってたいへん苦しい時代だったと伝えられる明治時代において、こうした福徳講のような麓の信者からの寄進が天上寺の維持・運営に大きく寄与したであろうことは想像にかたくありません。なお、住吉には、福徳講のほかに「太栄講」という講も存在したことが『住吉村誌』に記されています。こちらは、摩耶山天上寺と一王山十善寺（灘区）とを信仰する講でした。

■江戸時代における摩耶山と住吉

さらにさかのぼって、江戸時代に摩耶山と住吉とがどのような関係にあったのでしょうか？　ただし、摩耶山にも住吉にもこのことを解くための材料となる史料があまり残っていません。それは、先に述べたように摩耶山天上寺が火災で焼失したことと、住吉も神戸大空襲によって多くの史料が焼失したことが影響しています。

そんな中にあって、住吉と摩耶山とがかなり深くつながっていたことをうかがわせる史料がわずかに残されています。

本住吉神社の境内の中で、現在のだんじり保管庫北半分あたりは、かつて神宮寺という寺が建っていました。神宮寺というのは、明治維新までの神仏習合思想のもと、神社に付属して建てられていた寺院のことです。現代では、神社と寺とが一体になっている状況を想像することすら難しいでしょうが、江戸時代までは、神社の実質的な運営を神宮寺や宮寺（宮守）と呼ばれる寺院の僧侶が行ったり、逆に寺院の中に神祇を祀った鎮守社が置かれることは、なんらめずらしいことではありませんでした。


本住吉神社の神宮寺（矢印。「摂津名所図会」より）

本住吉神社は、中世以来神主をつとめておられる横田家（現在は宮司）がある一方で、宮守寺とも呼ばれた神宮寺も存在していたというやめずらしい運営形態をとっていました。この神宮寺については、古くは『住吉村誌』に記載があり、また本住吉神社宮司横田正紀先生もその著書で論じておられます（『本住吉神社誌』（昭和四七年）、『本住吉神社詳誌』（平成二二年））から、くわしくはそちらにゆずることとしまして、ここでは江戸時代の天明年間に神宮寺住職の交替に摩耶山天上寺が大きく関わっていたことを概観しておきたいと思います。

まず天明元年（一七八一）一二月、神宮寺の住僧だった慈源という僧が、摩耶山に入院（住職として寺に入ること）することになったため後住（後継の住職）に弟子の源信という僧をあてることが決定しています。摩耶山忉利天上寺も本住吉神社神宮寺もともに高野山真言宗の末寺でした。慈源の摩耶山入院もそうしたゆかりもあったのでしょう。その後、天明六年八月に、神宮寺住職は、源照という僧に交替しています。源信と源照の関係はよくわからず、比較的短期間で源信が神宮寺住職を辞した事情も不明ですが、ある

いは神宮寺が天明四年に火災で焼けてしまったことと何か関係しているのかもしれません。

しかしながら、住職源照の時代もきわめて短期間に終わります。翌天明七年八月、住吉村は神宮寺住職源照が「狂病」のため住職を交替させたいとの願書を、領主である幕府の大坂代官、寺社関係を管轄する大坂町奉行所、本山の高野山庫蔵院に提出しています。

では誰と交替させようとするのかというと、八月二二日付で出されている庫蔵院あて宛の書付によれば、住吉村役人はまず「先住玉蔵院」に「御公用寺役」をたのみたいと考えていたが、六月に惜しくも死去してしまったので、「因縁之地」でありますので王蔵院と同じく天上寺の塔頭の一つである大乗院の孝運という僧に寺役の兼帯（兼任）を依頼したいと述べています）。この措置は、正式な後住が決定するまでの暫定措置としてだったようで、大乗院が提出した書付にもその趣旨が強調されています。実際、早くも翌天明八年六月には、もと兵庫七宮の神宮寺の弟子だった弁教という若い僧（二六歳）が後住に決定しています。

天明7年高野山庫蔵院宛の書付写し（合成写真。本住吉神社文書）

摩耶山忉利天上寺と住吉村とは「因縁」で結ばれているんだとの認識は、双方の書付にみえるところです。どのような「因縁」があったのかはわかりませんが、摩耶山と住吉とのかんたんには切れることのない深いつながりが感じられるエピソードです。

■巡礼と住吉

江戸時代に灘目を通行した人の旅日記を読んでいると、寄り道をして摩耶山へ登山している記事をまれに目にすることがあります。それは西国三十三ヶ所札所を巡っている巡礼者であることが多いのですが、彼らが西国街道をはずれて摩耶山方面へ向かう道をたどりはじめるのが住吉村からだったケースが意外に多かったのです。天明三年（一七八三）四月に陸奥国田村郡上大越村（現福島県田村市）から西国三十三ヶ所巡礼のためにはるばる旅してきた白石三次という人が書いた日記に次のような記事があります（『西国道中記』天明三年四月条（『大越町史』））。

（前略）
一住吉江弐里、泊屋在之、イバラ廿六日泊、覚大夫、木銭三十弐文、米百拾文、此町中ニ住吉大神宮四社在之、御庭之内ニさゝれ石ト云在之也、此町出口ゟ右江よける細道なり、まや山江直道
（後略）

白石三次のいう「此町出口」とは、本住吉神社鳥居前を通っていた西国街道を西にとり、しばらく続いた住吉の町並みが尽きるあたりをさします。そこは御影村との村境の近くですが、現在の国道2号線御影中町交差点より一本南にある細い道が旧西国街道です。かつてこのあたりには、石の道標が立っていたらしく（山下道雄・沢田幸男・永瀬巌共著『神戸の道標』神戸新聞出版センター、一九八五年、一〇一頁）、それが後に西地区会館の前に移されていましたが、阪神淡路大震災後、会館を改築した際に撤去されてしまい、現在行方不明となっています（荒木勉氏HP「神戸の道しるべを訪ね歩く」）。もし道標が失われてしまったとすれば、大変残念です。これも何かごぞんじの方がおられたら、資料館まで是非お知らせください。

『神戸の道標』によれば、次のような文面が読み取れたそうです（同書）。

右　世話人　茶や［　］
正　（種子）すぐ妙けん道
　　左まやさん道
右　西ノ宮道

右へ西ノ宮、左へ摩耶山ということは、西国街道を東からではなく西から歩いてきた人へ向けた道標ということになりそうです。左へ折れて山の方へ向かうと、摩耶山方面と北の妙見宮の方へ向かう道になるという意味なのでしょう。いずれにしても摩耶山への道の分岐点としては、白石三次の旅日記と照らし合わせてもふさわしいものと思われます。

藤木喜一郎氏によれば、文化九年（一八一二）に京都のう水という俳人（俳句読み）が摩耶山に登山したきっかけが住吉の旅宿（水茶屋？）に勧められたからだったそうです（「昔の旅行者が見た摩耶山」（『神戸史談』二一五、一九五九年））。当時、住吉村が摩耶山登山の出発点であったことがわかります。

以上のように、住吉村と摩耶山との関係は、村人による信仰を中心に、灘目という同じ地域内にある寺院社会における結びつき、さらには外からやってくる旅人を住吉の水茶屋が摩耶山へ勧誘するというように、じつに多方面にわたるものだったのでした。